

紫色尿バック症候群（PUBS）の疑いのある症例

平成調剤薬局 黒野店

近年では、在宅医療が進み、寝たきり、認知症等への薬剤師の関わりが多くなってきているところです。その中で、以前、ある福祉施設にて発生した「紫色尿バック症候群（PUBS）」の症例を下記に報告します。

（事前情報）

担当看護師から、ある患者様で最近、尿バックとチューブに紫の着色が見られるがどうかとの問い合わせがあった。現場に駆け付けて、現物の確認を行ったところ明らかに、尿バック、チューブへの色素沈着が見られた。また、尿自体への着色は見られなかった。

他の患者に関しては、このような状況は無く、当該尿バックも使用前には透明な状態であった。

患者様の状態は、常時、便秘気味で便秘薬（重質酸化マグネシウム、時に浣腸）を使用している。最近、尿の出が不安定な状態があるようだが、認知症の為、はっきりした意思を伝えることが困難な状態である。



尿の色調



バック、チューブの色調

（考えられる原因）

紫色尿バック症候群（以下 PUBS）が原因と考えられ、これに伴うバック、チューブの着色が発生したと推測された。（発現機序は別紙参照）

患者要因としては、食事内容、腸内環境、尿路の状態・感染等が関与していると考えられ

る。リスクファクターとしては慢性の便秘、尿路感染、尿のアルカリ化、性差（女性が多い）等が挙げられている。

「トリプトファン-インジゴ仮説」と臨床病態

	支持する所見	矛盾する所見
1. 便秘	慢性の便秘	便秘のない症例
2. 尿の pH	尿のアルカリ化	中性 pH
3. 尿路感染	サルファターゼ / フォスファターゼ産生菌の増殖	多彩な菌の検出、無菌尿
4. 尿中インジカン	陽性、増加	陰性、増加なし
5. 尿バック内の色素	インジゴあるいはインジルビンの検出	インジゴ、インジルビン以外の色素の検出、胆汁酸やステロイド物質
6. 血中トリプトファン濃度	トリプトファン減少	他のアミノ酸の変化(バリン, α -アミノ-n-酪酸)

(結論)

今回の事例に関しては、尿バック及びチューブが紫色に着色している点、患者様が慢性の便秘、尿路感染の疑いがある状態を踏まえ、便秘、尿路感染の改善の為、受診を勧めることができた。結果として、当患者は受診後、尿路感染と診断され、便秘の解消によりPUBS は消失したとの事であった。

ただし、全てこの現象が当仮説に相当するわけではないことも念頭において対応をしなければならない。その他薬剤においても、ファーストシン静注用(セフェム系抗生物質)やミノペン点滴静注用(テトラサイクリン系)等は尿への着色が見られ、バックへの着色も起こるが、非常に薄くしか着色はしないようである。

以上

別紙

(PUBSの発生機序)

「トリプトファン-インジゴ仮説」による PUBS (紫色蓄尿バッグ症候群) 発現機序

